

司法試験合格者体験談

「在学中に意識したこと」

平成 27 年度修了 既修
藏野 時光

私は、1 回目の受験で合格することができました。既修として入学しましたが、入学時は法的知識、法的思考が未熟でした。高等司法研究科に在籍した 2 年間、教員の方々をはじめ、様々な方のお世話になりました。様々な方の支えがあってこそ、法的知識、法的思考を身につけ、合格することができたと考えています。

私は、この 2 年間、①授業から学ぶ、②自分で考えるという 2 つの方針を意識して勉強しました。①については、授業で問われた知識、論ずべき点に関する基本書の項目や判例等を調べるのみならず、それらと同じ条文で問題となりうる論点や判例等の整理まで行うことを意識していました。科目ごとにまとめノートを作成し、「これを論ずべきときはこの評価軸を意識する」などという思考の型を記載していました。②については、問題演習での思考過程を他人に説明できるようにすることを意識していました。

司法試験では、考えたこともない法的問題点を論述することになるので、常に使える知識を蓄え、自らの言葉で説明できるように整理しておく必要があると考えています。

司法試験受験生の皆さまは何らかの形で自主ゼミをしたいと思います。私は、自主ゼミにおいて、「自分は～と考えるけれども、どうだろう」と発言するようにしていました。自主ゼミの活用法は様々だと思いますが、自らの主張を交えて議論をすることが重要であると考えています。

司法試験に合格するためには、日々の努力が必要となります。司法試験受験生の皆さまは、日々自分で思考することを忘れず、勉強をしてくださいとしたいと思います。

「成績中位層、下位層の皆さんへ」

平成 26 年度修了 未修
大西 章

夢と希望を胸に法科大学院へ入学したものの、成績があまり上がらない皆さん。諦めてはいけません。ここからの頑張り次第で充分司法試験に合格します。

まず、真の合格レベルを知りましょう。巷に出回っている合格体験記は成績優秀な人の話ばかりです。参考になりません。ほんの少しの差で合格（不合格）になった人たちの話を集めるのが近道です。しかし、そのような情報はあまり出回っていません。次善の策として、ギリギリ合格した人の再現答案を読みましょ。過去問集は、再現答案がたくさん載っているものを選びます。1 科目あたり 45 点～55 点くらいの答案を読みましょ。平成 28 年度以降は各科目のランクが分かります。A、B 評価を揃えているのに、一部 E や F がある人の答案は、情報の宝庫です。

次に、答案の書き方を学びましょ。これは、上位合格者の再現答案を読みましょ。特に、5 ページ程度でコンパクトにまとめている人が、何をどのように書いているか読み、そして真似ましょ。ポイントは、どの論点を書いているか、ではなくて、どう書いているか見ることです。大抵、長々とした一般論は書かず、判例の規範をコンパクトに示し、事実を丁寧に示しているはず。頭でわかっている、練習しないと本番では書けません。

総じて、司法試験に向き合えば、確実に合格できます。初年度短答落ちから 2 回目で合格した私が言うのだから間違いありません。成績中位層、下位層の皆さん。これからの頑張り、阪大と、あなた方の人生を変えます。頑張ってください。応援しています。

「弱点の認識」

平成 26 年度修了 未修
小西 総一郎

私が後輩のみなさんに是非実践していただきたいことは、自己分析とそれに基づいた目的意識をもった勉強です。

私は今回 2 度目の受験で合格させていただきました。1 度目が不合格

になった後、合格した友人に私の弱点をきいてまわりました。私は民事訴訟法が苦手で、友人から「あなたは条文を知らなさすぎる」と言われました。

これが恐ろしいことに、自分ではその力がないとは思っていませんでした。授業であってられてもある程度答えることができ、主要な論点はわかっているつもりであったがゆえに、自分は条文くらい引けると思い込んでいました。

友人のアドバイスもあり、出てきた条文は必ず六法で読むというルールのもと、有斐閣アルマを二周読みました。別途問題集を 1 冊こなしましたが、結局模試も本番も一番よかったのは民事訴訟法でした。

やみくもに勉強していても得るものがないとは言いません。しかし、やはり効率が悪いのはたしかです。是非勉強の前に自己分析をしてください。試験を解くためには読解力、知識、論点を思いつくり、表現力、記憶力、条文を引く力、といった様々な能力が必要です。それらのうち、自分がもう十分有しているものに時間をかけても効率が悪いです。自分に足りないものを洗い出し、それを身につけるための勉強をしてください。

よく合格者がいう「勉強方法はそれぞれ」というのは、この弱点を見つけてからそれを克服するための勉強法のことです。多くの合格者は意識的かは別として自分の弱点の洗い出しをしています。

後輩のみなさま全員の合格を心から願っております。

「胸を張って試験に挑め！」

平成 26 年度修了 未修
竹本 桂

私は、二度目の受験で合格しました。一度目の結果が、合格に遠からず、でしたので、二度目の受験に気を向けることができたと思います。学校の成績は、学年の真ん中あたりでしたが、それでも合格することができます。しっかり勉強し、胸を張って受験してください。

司法試験対策をするにあたり、これだけはとあってずっと守っていたことがあります。それは、答案に示すべき「正解」を追い求めるということです。司法試験も点数のつく試験ですから、必ず正解があります。ここでいう「正解」とは、司法試験委員がその試験で求めている一般的な答えです。「正解」を知るには、過去問を解いて、出題趣旨や採点実感を丁寧に読み、その問題ではどのようなことが求められていたのか、考えることが最善です。それを繰り返すことで、どんな問題が出て、どのような点に気を付けて答えを書くべきか、どのレベルまで求められているのか、なんとなくでも掴めてきます。そして、これに合わせて、自分がどのような知識を身につけるべきか考え、勉強してきました。

とはいえ、他人の勉強方法は、他人に合ったものでし、抽象的で会得しにくいものです。私からのアドバイスは、自分が答案上でベストを尽くせるような勉強の仕方、知識の習得方法を、いち早く見つけて実践してください、ということです。試験会場では、ロースクールで切磋琢磨した同志の姿が最後まで自分を勇気付けますが、日々の勉強については、やはり自分個人との戦いです。自分のレベルアップに励んでください。



本研究科では、学生委員会（学生のクラス代表で構成する組織）の企画・進行により、9 月 16 日（金）午後 2 時から豊中総合学館 4 階 401 講義室において、司法試験合格体験報告会を開催しました。

発行元

大阪大学大学院高等司法研究科
発行：2016 年 11 月 1 日



No. 18

ニューズレター 司法試験特集号

研究科長からのメッセージ

2016 年司法試験の結果と 法科大学院の動きについて

高等司法研究科長 下村 眞美

高等司法研究科の本年司法試験の結果の分析と当面する課題については、本号後掲の特集記事に委ねますが、昨年と同様、低調な結果に終わったことをご報告しなければなりません。司法試験の全合格者が昨年から 267 人減ったことを考慮しても、本研究科としては、この結果に対して、危機感をもって対処してゆく所存です。基本方針の二つの B (Basis, Behavior) のうち、学修における Basis の確立が重要と考えています。

法科大学院の全国的な動きとして、法学部との連携が強く求められています。本研究科は、独立研究科ではありますが、従来から法学研究科・法学部や国際公共政策研究科と連携を図り、互いに教育に当たってきた実績があります。今後もこれまでの積み重ねに加えて、早期卒業制度の創設を検討するなどさらに連携を強化してゆきます。

また、本年度も「法科大学院公的支援見直し強化・加算プログラム」の募集があり、昨年度に「優れた取組」と評価されたものに加えて、あらためて「グローバル法曹養成の取組」も提出しました（表参照）。昨年採択された取組について、真摯に実施してきた成果や新規として提出する取組が公的支援基礎額の増額につながることを期待しています。

| 本年度提出の取組名 | 目的 |
|--|---|
| I コンタクトチャートシステムを活用した質の保証を伴う短期法曹養成のための教育改革の取組 | 「経済的・時間的負担の軽減」を目指した、学部・LS 一貫教育の追求 |
| II “OULS' SA” (オルサ) 掲示板システムによる自主学習ネットワーク構築の取組 III パブリック法曹養成の取組 IV グローバル法曹養成の取組 V 智適塾プロジェクトによる先端的法曹養成の取組 | 「教育の質の向上」を目指した、学習支援の充実、ポスト LS の多様な活躍を可能にするキャリアデザイン教育の充実 |
| VI 関西大学法科大学院への支援の取組 | 法科大学院制度全体の質の向上を目指した他 LS との連携の追求 |



平成 28 年司法試験合格者祝賀会

お問い合わせ

大阪大学大学院高等司法研究科
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-6
TEL : 06-6850-5973
HPアドレス <http://www.lawschool.osaka-u.ac.jp/>

2016年の司法試験の結果について

副研究科長 水谷 規男

【はじめに】

2016年9月6日に平成28年の司法試験の合格発表がありました。本研究科の修了生は、157人が受験し、最終合格者は42人でした。昨年は48人の合格でしたから、今年の結果は、本研究科にとって相当に厳しいものです。この結果を真摯に受け止めるとともに、的確な原因分析をしたうえで、合格者を増やすための対策を講じ、来年度の試験を迎えたいと考えています。

今年度は、119人が短答式試験に合格しましたが、最終合格者は42人とどまりました。この結果、短答合格者の合格率は過去最低だった昨年よりさらに下回りました。今年、短答は通っても論文で不合格になる者が3分の2近くに上ったということです。短答合格者の合格率で見たときに、40%を下回ったことが過去3回ありますが、2年連続は今年がはじめてで、率も昨年より下がっています(表1参照)。かつては、阪大の修了生は「書く力」はあって、短答式の不利を論文

で挽回するというタイプが多かったように思いますが、このような特長は、もはやないというべきでしょう。

大学別の順位で見ると、合格者数では7位(昨年は9位)、合格率(対受験者)では9位(昨年度は9位)という結果でした。全体の合格者が昨年に比べて250人以上減っていることを考慮に入れ、大学間の相対的な比較をすると、昨年と大きな差はないように見えますが、今年の結果は昨年以上に深刻だといえます。

まず、在学中の成績上位者の中でも不合格が目立ち、学内成績と新司法試験の合否とのきれいな相関性が崩れていること、合格者の実数で平成27年度の修了生が平成26年度の修了生よりも少ないことも今年の特徴です。これが対受験者合格率と合格者数で平成21年度以来続いてきた「隔年現象」が崩れ、2年連続で「谷」になってしまった要因になっています。

【表1】受験者・合格率の推移

| 年度 | | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 | 2014 | 2015 | 2016 |
|---------------|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 受験予定者数(A) | 全国 | 2125 | 5280 | 7710 | 9564 | 10908 | 11686 | 11100 | 10315 | 9159 | 8957 | 7644 |
| | 阪大 | 21 | 87 | 146 | 197 | 236 | 210 | 217 | 176 | 153 | 180 | 168 |
| 受験者数(B) | 全国 | 2091 | 4607 | 6261 | 7392 | 8163 | 8765 | 8387 | 7653 | 8015 | 8016 | 6899 |
| | 阪大 | 21 | 73 | 127 | 155 | 180 | 171 | 177 | 140 | 137 | 165 | 157 |
| 短答合格者数(C) | 全国 | 1884 | 3479 | 4654 | 5055 | 5773 | 5654 | 5339 | 5259 | 5080 | 5308 | 4621 |
| | 阪大 | 17 | 54 | 103 | 110 | 145 | 125 | 128 | 110 | 109 | 125 | 119 |
| 短答合格率(C/B) | 全国 | 90.1% | 75.5% | 74.3% | 68.4% | 70.7% | 64.5% | 63.7% | 68.7% | 63.3% | 66.2% | 67.0% |
| | 阪大 | 81.0% | 74.0% | 81.1% | 71.0% | 80.6% | 73.1% | 72.3% | 78.6% | 79.6% | 75.8% | 75.8% |
| 最終合格者数(D) | 全国 | 1009 | 1851 | 2065 | 2043 | 2074 | 2063 | 2102 | 2049 | 1810 | 1850 | 1583 |
| | 阪大 | 10 | 32 | 49 | 52 | 70 | 49 | 74 | 51 | 55 | 48 | 42 |
| 受験者合格率(D/B) | 全国 | 48.3% | 40.2% | 33.0% | 27.6% | 25.4% | 23.5% | 25.1% | 26.8% | 22.6% | 23.1% | 22.9% |
| | 阪大 | 47.6% | 43.8% | 38.6% | 33.5% | 38.9% | 28.7% | 41.8% | 36.4% | 40.1% | 29.1% | 26.8% |
| 短答合格者合格率(D/C) | 全国 | 53.6% | 53.2% | 44.4% | 40.4% | 35.9% | 36.5% | 39.4% | 39.0% | 35.6% | 34.9% | 34.3% |
| | 阪大 | 58.8% | 59.3% | 47.6% | 47.3% | 48.3% | 39.2% | 57.8% | 46.4% | 50.5% | 38.4% | 35.3% |

【既修、未修別の状況】

次に既修・未修別の状況を見てみます。まず既修者については、合格率の推移は表2のとおりです。阪大の既修者は、初年度を除き、全国平均に比べて高い合格率を残してきました。しかしながら、昨年度と今年度は全国平均との差が非常に小さくなっています。その原因は直近年度の修了者の合格率が急激に低下したことによるものと考えられます。また、当初3年間は入学者選抜

の段階で内部振り分け方式を取っていたため、既修者の数が少ないという特徴がありましたが、それ以降は既修入学者を徐々に増加させてきました。それに伴って既修者全体の合格率が下がってきていることが分かります。2年で修了して司法試験を突破するだけの実力を有していない既修入学者が多くなっていることをあらためて認識せざるを得ません。

【表2】既修者の合格率(合格者/受験者)

| 試験年度 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 | 2014 | 2015 | 2016 |
|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 既修全体・全国 | 48.3% | 46.0% | 44.3% | 38.7% | 37.0% | 35.4% | 36.2% | 38.4% | 32.8% | 32.3% | 30.7% |
| 既修全体・阪大 | 47.6% | 68.8% | 75.0% | 56.4% | 55.3% | 44.2% | 54.7% | 49.2% | 47.8% | 32.6% | 32.9% |
| 直近年度修了・全国 | ↑ | 47.1% | 51.3% | 48.7% | 46.4% | 41.8% | 43.2% | 49.2% | 44.8% | 44.8% | 43.7% |
| 直近年度修了・阪大 | ↑ | 85.7% | 80.0% | 61.8% | 67.7% | 41.7% | 52.3% | 52.9% | 48.8% | 29.1% | 36.1% |

次に未修者の状況を見てみます。阪大の未修の修了生は、ほぼ一貫して全国平均より高い合格率を残していることが分かります(表3)。しかしながら、その差は、この2年は小さくなっていますし、合格率が高い年でも30%台にとどまっています。この現実、学生、修了生の立場から見れば深刻です。法科大学院制度は、未修者でも3年間の学修で法律家になれるだけの実力を身に付けさせることを制度的な目標にしていました。し

かし現実には、法曹を志して仕事を投げ打ち、あるいは他学部などから法科大学院に入学しても、(表4の累積合格率の実績から見ても)2人に1人程度しか法曹になれない、ということなのです。本研究科では、再チャレンジプログラムによる学習支援など未修者対策に力を入れてきました。しかし、その効果が数字の上でも顕著に現れているとは言えないようです。

【表3】未修者の合格率(合格者/受験者)

| 試験年度 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 | 2014 | 2015 | 2016 |
|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 未修全体・全国 | 32.3% | 22.5% | 18.9% | 17.3% | 16.2% | 17.2% | 16.6% | 12.1% | 12.6% | 11.6% |
| 未修全体・阪大 | 36.8% | 31.8% | 25.9% | 33.1% | 21.8% | 34.5% | 26.0% | 32.9% | 25.0% | 19.4% |
| 直近年度修了・全国 | ↑ | 23.7% | 22.2% | 21.0% | 23.7% | 21.9% | 23.9% | 16.6% | 15.3% | 14.9% |
| 直近年度修了・阪大 | ↑ | 37.1% | 21.3% | 33.3% | 30.2% | 45.5% | 33.3% | 37.0% | 19.4% | 19.2% |

【今後の取り組み】

本研究科の平成27年度までの累積の修了者は、903人になりました。そのうち司法試験に合格した者は533人で、累積合格率(全修了者中の合格者の率)は59.0%になりました。累積合格率60%という、ここ数年本研究科が掲げてきた目標は、いまだ達成されていません。司法試験の合格率は、一般に修了直近の受験が最も高く、2回目受験、3回目受験と回を重ねるごとに合格率自体は低下していく傾向にあります。しかし、過年度の修了生も5年の制限の中で少しずつ合格者が増えていきますから、累積の実績で見ると、阪大の修了生は、既修者で

は概ね8割程度、未修者でも5割程度の実績を残しているといえます(表4)。少なくともこのレベルを保ち、さらに向上させていく必要があります。2回目以降の受験となる修了生へのサポートも重要です。後援基金の資金援助によってOB弁護士が少人数で指導する修了生向け勉強会などの取り組みが行われていますが、ここ2年ほどは直近年度修了生の不振が目立ちますから、修了生支援の取り組み、特に「書く力」を強化する必要があります。捲土重来に向けて、各位の一層のご助力をお願いします。

【表4】累積合格者数、累積合格率(合格者/修了者)

| 修了年度 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 | 2014 | 2015 |
|---------------|-------|--------|--------|---------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 修了者数(うち未修者) | 21 | 77(70) | 95(79) | 119(84) | 104(69) | 93(55) | 95(51) | 63(26) | 76(30) | 95(38) | 65(26) |
| 累積合格者数(うち未修者) | 17 | 45(38) | 55(42) | 68(38) | 64(34) | 63(35) | 65(29) | 47(19) | 49(17) | 42(13) | 18(5) |
| 累積合格率(全体) | 80.1% | 58.4% | 57.9% | 57.1% | 61.5% | 67.7% | 68.4% | 74.6% | 64.4% | 44.2% | 27.7% |
| 累積合格率・既修 | ↑ | 100% | 81.3% | 85.7% | 85.7% | 73.7% | 81.8% | 75.7% | 69.6% | 50.9% | 33.3% |
| 累積合格率・未修 | — | 54.3% | 53.2% | 45.2% | 49.2% | 63.6% | 56.9% | 73.1% | 56.7% | 34.2% | 19.2% |